ONE'S *voice*

野田秀樹 × アイタイヒト

VOICE.4

ダンサー・振付家・演出家

勅使川原三郎

若い世代と向き合うということ。

80年代、それまでのダンスの定義を一気に塗り替える作品で登場し、近年では海外歌劇場でのオペラ演出など、幅広く第一線で活躍を続けている勅使川原三郎。来年度から、本劇場の芸術監督・野田秀樹と多摩美術大学で共に教壇に立つことに。劇場、学校、稽古場を通してふたりが若い世代に期待するものとは？

これまでとは違う人たちと出会いたくなった

野田　意識してそうしてきたわけではないんですが、94年にNODA・MAPを立ち上げてから、そこで出会う人以外とは、演劇の世界でもほとんど付き合いがなくなっていたんです。多摩美から「若い人に演劇を教えませんか？」という話をもらったのと、この劇場から芸術監督の話をもらったのがほとんど同じ時期で、ちょうど自分でも、もう少し外の人たちと接していくべきなんじゃないかと考えていたところでした。

それでどうせならと思って(笑)、両方受けたんですが、そう考えるようなったのは、言ってみれば危機感というか。自分が芝居をつくるときに、若い役者と出会いますよね。そこで「いまの若い役者はどうしてこういうやり方しかできないんだろう？」と疑問を感じることがある。でも、若い人たちと継続的に接していないからゆっくり話を聞いたことがない。だとしたら、ちゃんと会って話をしたほうがいいんじゃないかと思ったんですよ。

プロもいますし、そうじゃない人たちもいます。ただ僕は、学生か学生じゃないかも含め、プロかマアチュアかで区別する意識がほとんどないんです。自分がそういう育ち(学生時代に立ち上げた劇団からそのままプロになった)ということもあって、役者であれ演出家であれ、何かの表現者を目指しているなら、プロもアマも関係ないだろうと。

日本の演劇は、人材の数もレベルも、学生劇団によってかなりの部分がつくられてきたという、世界的に類のない歴史がある。いま活躍している役者、演出家、劇作家の多くが学生劇団から出てきているんですよね。それは必ずしも恥じるべきことではなくて、いまの若い世代もそうなる期待ができる。だとしたら、劇場や学校で積極的に出会って話をしていきたいと思いました。

勅使川原　僕は最近ダンスを見ることがあまりありませんが、今の時代の身体性はどうかという事には関心があります。30年近く前から僕は創作を始めると同時に一般向けのワークショップを開き多くの若者と出会ってきました。ワークショップを開いた理由は、作品以前にやるべき事、つまり技術訓練や考えることを若いうちに経験する重要性を伝えたかったからです。僕のワークショップには20年通い続けている人がいたりする。彼らは舞台に立つのが目的ではなくて、ワークショップを通して自分の身体を研ぎ澄ましているんです。でも、技術的にも相当なものですけどね。

野田　すごいでしょうね、なかなかそういう話は聞きませんよ。

勅使川原　それと僕自身が、僕は美術家になりたいと思っていたけれど、ある時に自分の身体自身に可能性を感じてダンスを始めたんです。既成のダンスに魅力を感じてダンスをはじめたのではない。僕は人間が知らない状態から感じ取ってゆく驚きに関心があります。だから若い人たちにも全然期待していません。流行や既成概念にとらわれず勝手にやったらいいと思う。でも真剣にね。もう少し補足すると、何かをわかってから始めなくていい。むしろ、わからないまま始めたほうがいいと言いたいですね。

野田　それは至言ですね。

勅使川原　最初からわかったつもりでいたら、逆にすごく時間がかかってしまうと思います。必ず途中で全部の価値観をひっくり返さなきゃいけなくなるから。僕はいまだに、まず触ったり匂いをかいだりというところから始めます。当たり前だと思われていることを改めて身体を通して感じる、それをしないと、どんなダンスをしようと意味がないと思っているので。

野田　そういう実体験から出てくる言葉こそ、若い人にとって本当に必要なものでしょうね。

勅使川原　これはある意味、プロフェッショナルというくくりからは最も遠い行動ですけど(笑)。

野田　もちろん言い方はいろいろで、何をどんなふうに伝えるか、何が教えられるのかは人それぞれですけど、ある程度の経験を積んで、その先、若い世代に向き合っていこうと考える節目って、たいていのつくり手にはあるんじゃないですかね。僕が多摩美で教えることになったと聞いて、あの柄本明さんがわざわざ連絡をくれて「学生たちと話をしてみたい」と申し出てくれたんですよ。こっちは願ったり叶ったりでうれしかったですど(笑)。

勅使川原　だって、若い人がどんどん出てきてくれないとつまらないですよね。「ダンスの世界」が、というより「人間全体」が(笑)。

自分に対する批評精神を持っているか

野田　この劇場の芸術監督に就任するときに考えたのが、まさにそれですね。ここは小ホールが2つあるので、若くて面白い劇団の人たちが使ってくれる劇場にしたいと。そうでないと若いお客さんも来ない。

勅使川原　つくり手に関していうと、生意気なヤツが出てきてくれないとつまらない。

野田　そこが難しいところです。海外の若い演出家たちと喋ると――国によって多少の違いはありますけど――、相手がどんなに有名な演出家でも、どんなに年上でも、表現者としては自分も同じところにいるんだという意識がはっきりとあって、対等な物言いをしますよね。でも日本は、先生と生徒の関係性が染みついている人が多い。だから“待ち”の姿勢が基本です。指示されるのを待っている。

勅使川原　そういう人は、どこで何をやってもダメでしょうね。若い人たちが上手くできるかどうか、僕らはそんなに気にしませんよね。それより、何を考えているのかに興味がある。

野田　年輩の人間が「こうしたほうがいい」と言うことが絶対正しいとは限らないですし。

勅使川原　表現はその人の「考え」なのですから、どんな表現でも独自に価値があればいい。でも、特にダンスはそうですが、まず表現できる技術がなければだめです。徹底した基礎技術が独特の内面性を表に出すことができると僕は考えています。それに、常に“怖さ”を感じていなきゃダメですね。怖さというのは、批評精神と言ったら固く聞こえるかもしれないけど、自分自身に対しても「本当にそれでいいのか？」と問い続けることです。

野田　それは若い人に特に大事だと思います。いま、社会全体が自己愛の時代になりつつありますよね。喋っている言葉を聞いても「僕って、

こういうヒトじゃないですか」なんて当たり前に言う。「お前のことをそんなに知ってるやつはいねぇんだよ」と言いたくなります(笑)。少なくとも表現者でそれは絶対に通じない。自分に対して批評精神をどのぐらい持っているか。

勅使川原　別の言葉に置き換えるなら皮肉、アイロニーですよね。表現にはそれが必要です。アイロニーを喩えるなら、表で聞こえるメロディーの裏で鳴っている音と言うのかな。聞こえない人もいるんですよ。でも聞こえる人に対しては、何がそれを鳴らせているのかとか、いろいろ考えさせるものです。

野田　せりふにしたことや、舞台上にあるものがテーマだと思われがちですけど、そうじゃない。

勅使川原　「人によって笑える」とか「人によって感動する」って怖いことですよね。でも怖いぐらいの力がないと、権力や規制など、見えないものには立ち向かえない。若い人にはそれを知ってほしいですね。

文：徳永京子

特別協力：多摩美術大学

今回のアイタイヒト

勅使川原三郎 SABURO TESHIGAWARA

てしがわら・さぶろう　ダンサー、振付家、演出家。81年より創作活動開始。85年にダンスカンパニーKARASを設立。舞台美術、照明、衣裳、音楽なども自ら手がける透徹した美意識に貫かれた独自の作品は、世界のアートシーンに多大な影響を与えている。今秋パリオペラ座バレエ団へ振付ける他、今後もヨーロッパの劇場を中心に、公演・振付・オペラ演出等の依頼が続く。

9月6日(金)～8日(日)　新作『第二の秋』上演予定。
東京芸術劇場プレイハウスにて。 http://www.st-karas.com/

野田秀樹 HIDEKI NODA

のだ・ひでき　劇作家、演出家、役者。1955年、長崎県出身。大学在学中に劇団夢の遊眠社結成、一大ブームを巻き起こし92年に解散。ロンドン留学を経て93年、NODA・MAPを設立。国内のみならず海外でも積極的に作品を発表。09年、東京芸術劇場の芸術監督に就任。多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科教授。

10月4日(金)～11月24日(日)　野田地図　第18回公演『MIWA』
東京芸術劇場プレイハウスにて。その後、大阪、北九州にも巡回。
http://www.nodamap.com